

遙かなる星の流とせれはに下
デルフィニア戦記 18

茅田砂胡

中央公論新社



カバーイラスト

口 絵 沖 麻実也

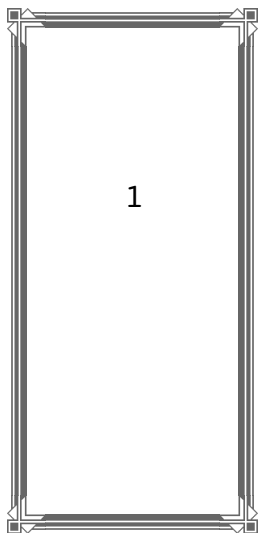
挿 画

カバーデザイン しばみつお

(伸童舎)

タイトルロゴ・マークデザイン

水野デザインルーム



ヨークの城は夏の盛りを迎えようとしていた。

白亜の建物が低く立ち並び、庭園内に設けられた噴水や小川が心地よい音を立てている。夏の陽光が燦々と降り注ぎ、さながら、光と水の宮殿だった。

その宮殿にデルフィニアの宰相ブルクスが客人となっっている。

コーラルを出発してから十一日後、ブルクスは万難を排してこのヨークにたどり着き、サンセベリア国王オルテスに謁見し、デルフィニアとの再同盟を

求めたのである。

「貴国の現在のお立場は十分に承知しております。パラストの手を取られたことももつともなことと存じあげます。しかしながら、忌憚なく申し上げれば、パラストのオーロン陛下は名もあり知もあり武勇もあれど、信には欠けるお方でございます。貴国と仲直りをなさったのも、我が国を攻める都合があつてのこと。デルフィニアに対して勝利を収めたならば、オーロン陛下がこのサンセベリアをも呑み込もうとすることは必定でございます。なればこそ、今一度、ぜひとも我が陛下の良き友となつていただきたく、かく参上いたしました」

パラストと和睦したばかりか、その要請に應えて今にも軍勢を出そうとしているヨークへ乗り込んでこんなことを言ったのだから、大変な度胸である。

今のこの時期、デルフィニアとの接触はサンセベリアには致命的だ。使者と会った事実だけでもパラストに知られたらどうなるかわからない。

それを承知で、オルテスは、正式の装いで謁見の間に現れ、この優秀な外交官と対面した。

「宰相が直々にお見えになるとは恐れ入る。しかも、こんなに、早く」

そう言うオルテスは微かに苦笑している。

「デルフィンニアの方々は翼でもお持ちですか？」

「方々——と仰せられますのは、私の他に、誰が」

「貴国の妃殿下のことです。スケニアとの海戦の最中、確かに我が国にお出で下されたのだが、あつという間にお帰りになられた」

「それは、それは……」

その王妃こそが大問題だった。

王妃がタンガに捕らえられた、その事実だけで、パラストは狂喜乱舞し、サンセベリアはデルフィンニアに勝ち目なしと見切つて、慌ててパラストと和解したのである。

「妃殿下は、今はタンガにおられるそうですね」

さりげなくそのことに触れてきたオルテスだが、

ブルクスはこれには答えず、話を進めた。

「パラストとの和睦は一時しのぎにしかありません。彼の国とともに滅ぶか、我が国とともに輝ける道を進むか、陛下はどちらをお選びなさいますか」

サンセベリアの若い国王は、ブルクスの申し出に素直に頷きはしなかった。

「それについては家臣とも協議せねばならないので、宰相にはしばらくお待ちいただきたい」

そう返されて、最初の謁見は終了したのである。

問題はその後だった。

案内役に従つて城内を進みながら、ブルクスは密かに、投獄されようが拷問されようがかまわないが、命だけは残しておいてもらいたいと考えていた。

命が惜しいわけではない。

死んでしまつたらオルテスを説得することができないからである。

しかし、待遇は悪くなかった。悪くないどころか、眺めのよい客間に通され、立派な着替えを用意して

くれ、ものなれた召使いが最高の給仕をしてくれた。

「お国元と違いましたよこのような田舎料理、お口に会うかわかりませんが……」

そう言いながら、食卓いっぱいには並べられるのは見事な山海の珍味である。

至れり尽くせりの待遇だが、扉の外には見張りが立っていて、ブルクスを監視している。

部屋から出ることも禁じられている。外部の人間と会うことも禁じられている。

待遇がいいだけで、実際は投獄されたのと少しも変わらないが、ブルクスは悠然と構えていた。

ブルクスの最初の仕事は、交渉相手に、話をする気にさせることだ。説得も外交も、相手に会話の意志がなければ進めようがない。交渉の席が持てれば、貴賓室きひんしつだろうが牢屋だろうがかまいはしないのだが、この良すぎるくらいの待遇には少し首を傾げた。

少なくとも会話する意志はあるものと看るべきか、それとも、いっさい耳を貸す気はないという意思表示

示なのか、それだけが気になった。

ビルグナのことを考える。

囚われの王妃も、出奔しゅっほんした国王も気がかりだが、

サンセベリアの動きにもっとも影響を受けるのは、ビルグナを攻めているデルフイニア軍だ。

ここへ来る前、ブルクスはビルグナに立ち寄っている。近衛司令官のアヌア侯爵も一緒だった。

ビルグナ奪還に当たっているヘンドリック伯爵はブルクスともアヌア候とも長い馴染みである。

再会の挨拶もそこそこに、慌ただしく情報を交換し合った。

タンガの言い分を聞いて、硬骨漢のヘンドリック伯爵がどんな反応を示したか、言うまでもない。

ビルグナ攻めは相変わらず難航していた。なんと言っても、テバ河のすぐ向こうにまでパラスト軍が迫っている。そこは本来デルフイニア領だが、二年前までパラスト領だった。パラスト軍にしてみれば勝手知ったる土地である。我が物顔で駐留している。

ヘンドリック伯は語らなかつたが、このままでは、テバに架かる橋を奪われるのも時間の問題だつた。

アヌア候はそのままヘンドリック伯を援護するために残り、ブルクスはさらに単身、サンセベリアを直指して出発したのである。

この訪問がサンセベリアに歓迎されるとは思えない。その上、敵地であるパラストを横断しなければならぬ。

「これが今生の別れになるかもしれないな」

冗談ではなく言つて、老雄三人は厳かに酒を酌み交わしてきたのである。

オルテスが現れたのは、ブルクスが豪奢な牢獄に閉じこめられた翌日のことだつた。

「ご不自由な思いをさせて申し訳ありません」

「いいえ。とんでもない。お心遣いには心から感謝しております」

微笑しながら答えた。皮肉を言っているつもりはなかつた。

謁見の間からそのまま牢獄へ送られることも覚悟していたのだ。それを思えば、賓客並ひんきやくのこの扱いに不満を訴える理由は何もない。

「扉の外の見張りは気になりませんか？」

「ご苦勞なことだと思ひます。必要はないものとも思ひますが、それは陛下がお考へのような理由からではありません。貴国の承諾をいただかなくては、私は国へは帰れないのですから、わざわざ見張りを置かなくても、どこへも逃げは致しません」

オルテスの秀麗な顔がやや探るような色を見せていた。

ことはそう簡単ではない。

同盟を断り、この城を追い出したブルクスがその足でパラストに赴くことも充分にあり得る。そこで、サンセベリアのオルテスはデルフィニアへの恭順を約束してくれた、などとこの人が語つたら一大事だ。

デルフィニアの宰相ブルクスは国王の優秀な補佐役であり、辣腕らつわんの外交官として知られている。その

くらしいことはやりかねないのである。

警戒しながら、オルテスはさりげなく言ってみた。「では、ブルクスどの。残念ながら、この状況ではやはり、貴国にお味方することは難しいと言ったら、どうなさる？」

ブルクスにとつてはある程度、予期していた答えだった。

しかし、ここで引き下がったのでは外交にならない。表情を引き締め、力を込めて言ったのである。

「陛下。どうぞ損なご算段はなさらぬように……」

「無論そのつもりだ。しかし……」

オルテスは深い息を吐いて、

「パラストとデルフィニア、どちらを取れば確実に我が国の利となるか、今ひとつ掴みきれないが故、困っている」

軟禁したことに安心しているのかもしれないが、国王の言葉とは思えないほど率直な意見だった。

言い換えれば、それくらい判断の難しい問題だと

いうことだ。

「宰相の言われる通り、パラストが持ちかけてきたこの和睦は単なる一時しのぎにすぎないのかもしれない。だが、オーロンがサンセベリアを滅ぼす気であると決めつけたものでもない。こちらがおとなしくしていれば、パラストに服従を誓うちかだけですむのなら、屈辱的ではあっても国は守られる」

「逆のことも考えねばなりませんまい。安泰を選んだつもりが、行く手には大きな落とし穴が待ち受けているかもしれないぞ」

「いかにも。待ち受けているかもしれない。だが、取り越し苦労かもしれない」

「私が申し上げたいのはその危険の有無が、落とし穴の生じる起因が、すべてオーロン王のお心次第であるということですよ」

武勇も名誉も知もあれど、信義には大いに欠ける国王だ。口約束はもちろん書面で交わした約束さえ信用できない。

しかし、オルテスもまた国王である。

ほのかに笑った。

「宰相はまるで、ウォル王のお心なら信用できるとおっしゃりたいご様子だ」

「少なくとも、今、この状況ではそのとおりでありましょう。違いますか？」

平然と答えたブルクスだった。

「破つてもかまわぬ弱者との約束にはこだわらない、それが王というものであるならば、必要な相手とは決して仲違いをせぬように努めるのもまた王というものでしょう。我が国は現在、貴国の助力を心から必要としております。勝利した後も、後方からパラストに睨みを利かせていただかなくてはなりません。一時しのぎに貴国と手を結び、我が国を倒した後はさっさと捨てるつもりでいるパラストとは、大いに事情が異なります」

オルテスは半分感心し、半分呆れていた。

風変わりな国王には風変わりな宰相がつくものだ。

だいたい、これでは、必要なうちは大事にするが、要らなくなったら捨てますよと言っている点では、パラストと少しも変わらない。

そういうことは、普通、思っただけでも匂わせたりしないものだ。ましてやこうはつきり口にするなど、問題外である。

「ずっと手を携たずえていただく保証はないのだな？」

「そのような保証が誰にできましょう。明日は何が起るかさえ我々にはわからないのです。ただ一つ申し上げられることは、私も、もちろん私の主君も、貴国との友情が長続きすることを切に願っているということです」

「それは、このサンセベリアに利用価値が長くあることを願つてという意味か」

「忌憚なく申し上げればそういうことになるのかもしれませんが。ですが、陛下。どんな友情も、互いに得るものがなければ長続きは致しません。それは何も金銭及び物質的な利に限ったことではありません。

我が国の友となつていただければどれだけ心強いか、そのことを申し上げているのです」

オルテスは苦笑していた。

「私個人としては、人間的には、オーロン王よりもウォル王のほうが遙かに好きなのだが、王たる者がそんな好みに偏つて決定を下すわけにはいかない。同時にあなたの言葉に道理があるのもわかっている。どうしたものかな？」

本当に困っているような口調だった。あるいは、長年デルフィンア国王を支えてきた宰相との会話を楽しんでゐるのかもしれない。楽しんでいた。

「あなたの言われるとおり、我々には明日のこともわからない。よかれと思つて用いた政策が期待したほどの効果を得られなかつたり、これと見込んだ人材が予想ほどは使えなかつたりする。政治とは万事、一種の博打ばくちのようなものかもしれない」

「賭には違いありませんが、博打とは違います」と、ブルクスは言った。

「世に言う博打は、あれは完全な当てずっぽうです。運氣だけが頼みのものです。それに比べて、我々のすることは、決した後どう転ぶかは確かに賭ですが、博打に比べれば遙かに多くの判断材料があるのではありませんか？」

やんわりと丁重な口調ながら、ブルクスは強気である。押して押して押しまくっている。

ひたと視線を合わせながら、ゆつくりと言った。

「陛下もかつて大変な賭に勝利されました。兄君に代わつてこの国を統治するという、大きな賭に」

それだけのことを何の準備もなしにしたわけではあるまい。長い時間を掛けて同盟者を募り、周到に計画を練り、機会を窺っていたはずだ。

その上で、最後の最後に成功に賭けたのだ。

オルテスは微笑を消した。真摯しんしな顔で尋ねた。

「宰相も、日頃からそうした、賭にも似た決断に親しんでいることと思うが、今までにもっとも大きな成功を見た賭事はどのようなものだった？」

ブルクスは背筋を伸ばし、笑みさえ浮かべながら、答えたのである。

「私の生涯における最大の賭事は、六年前、主君が連れてこられた一人の少女を信じたことです」

「……………」

「私も、私の友人達も、陛下は何をお考えなのかと思いました。申し上げては失礼ながら、お気は確かなのかとさえ疑いました。ですが、その後のことはご存じの通りです」

「しかし、その人は今タンガに囚われている」

「陛下が救出に向かつておられます」

力強くブルクスは言った。

それ以上のことは言わなかったが、このままではおかないと、必ず王妃を救出してみせると断言したようなものだった。

オルテスはしばらく沈黙していた。

デルフィニアの国王と王妃……自分とリアとはまったく違う。ある意味、あれほど似合いの夫婦も

ないだろうし、あれほど異色の王妃もない。

ゆっくりと言葉を紡いだ。

「本当に、その人さえ無事であれば、な……」

ブルクスが思わず身を乗り出した時だった。

扉の向こうから召使いが現れて、ハイオン公爵が目通りを願っていることを告げた。

「公爵が？」

つい、問いかける口調になる。

それならなぜ公爵自身がここへ来ないのかという意味の問いだった。

ハイオン公爵はオルテスの信任厚い家臣であり、王妃の父でもある。この会見の席にやってきても、さほど非礼には当たらないはずだ。

小姓も少々戸惑っているようだった。

「ぜひとも、陛下にお越し願いたいと申されまして、あちらでお待ちでございます」

「わかった。——宰相。すまないが、失礼する」

断りを入れて、オルテスは席を立った。

小姓に案内されて別室に向かうと、やや堅い顔のハイオン公爵がオルテスを出迎えた。

公爵は四十年輩の男を一人伴っていた。

陽に灼けた顔色とがっしりした体格は紛れもなく農夫のものだが、身なりは立派なものだった。握りしめた帽子には洒落た鳥の羽の飾りがついている。

「陛下。これはヨーク郊外に牧場を持っている者で、ガルシアと申します。お耳には入れませんでした。私とは以前から親交のある者です」

ガルシアは帽子を両手に握りしめ、ぎくしゃくと頭を下げた。サンセベリア王家はそれほど庶民からかけ離れた存在ではないが、こうして城の奥深くに入り、自国の国王を前にしたのは、緊張するものも当たり前だった。

「ガルシアは近在でもなかなか裕福な家柄でして、代々、教育にも熱心です。稼業こそ牧場主ですが、ガルシアの父はパラストへ留学したこともあります。ですから家の者は皆、読み書きをよくします。この

心がけのおかげで、ガルシアの兄弟はあちこちに中にはかなり遠方に住んでいるものもいるのですが、互いの近況を知ることには不自由はしないのです」

「舅どの？ ずいぶん前置きが長いな」

「申し訳ありません。最初からすっかりお話ししたほうがよいかと思ひまして。ここからが本題ですが、ガルシアにはタンガに嫁いだ妹がいます。ジェダという、ボナリスの西に二十カーティヴほどの小さな村が在所だそうですが、その妹が先日、五年ぶりに里帰りしました。しばらく滞在し、タンガに戻る際、実家から鳩を連れていったというのです」

「鳩だと？」

「向こうに着いたら手紙を持たせて飛ばすと言って。ガルシアの家では郵便配達人の他にも、この手段をよく使っているのです」

ここまで聞けばさすがにピンとくる。

しかも、公爵の顔色から察するに、何かとんでもないことが起きたに違いない。

「その鳩は、どんな知らせを持ってきたのだ？」

ハイオン公爵は頷くと、ガルシアから細い紙片を受け取って、オルテスに差し出した。

薄い紙にびっしりと細かな文字が書かれてある。

読み進むうちにオルテスの顔からだんだん血の気が引いていった。最後には完全に凍りついていた。

手紙の内容は主に、ボナリスで起きた事件のことだった。

もっとも重大なのは以下の部分である。

「……ここはボナリスから離れているので、そんな大事件があったことなどちっとも知りませんでした。今日、向こうからやってきた金物の行商人が話してくれたのですが、ボナリスのお城はデルフィンニアの王妃さまに壊されてしまったそうです。戦女神様が天罰を与えたのだと、その光景はこの世のものではないと行商人は話していました。私も何度か見たことがあります、ボナリスのお城は天まで聳えるように大きくて、立派なものです。そのお城がたつ

た一日で粉々に壊され、それどころか、その戦いで、王様も戦女神様の怒りを受けて殺されたというのです。デルフィンニアの軍勢はケイファードを目指して進んでいるという話でしたが、王様が亡くなって、ケイファードのお城まで奪われたら、このタンガはどうなるのでしょうか。恐ろしいことです」

オルテスは何度も手紙を読み返した。

文字は読める。きれいな女文字だ。言葉の意味もわかる。十分に理解できる。

しかし、その内容とはいえば正気の沙汰ではない。

それこそ、とてもこの世の出来事とは思えない。

気づけばオルテスはじつとりと汗を浮かべていた。額を抑えてめまぐるしく思索した後、顔を上げて公爵に問いかけた。

「舅どの。この手紙をどう解釈しろというのだ？」

「それを私も、陛下にお伺いに参ったのです」

ハイオン公爵の顔も緊張に強ばっている。

オルテスはさらにガルシアに眼を向けて、厳しく

詰問した。

「この手紙の主は——お前の妹はどのような女だ？
ボナリスで一合戦あった程度のことを、一人勝手に
思いこみ、肉付けをして話している可能性は？」

ガルシアは慌てて首を振った。

「とんでもないことでございます。そりゃあ陛下の
おっしゃることもわかります。女の中にはやたらと
夢見がちで、本当に見たものと、見たと思ひこんで
いるものの区別ができないのがおりますが、あれは
違います。身体を使うことなら厭いとわずやりますが、
自分の頭の中で話をつくって書くなら芸当は、や
ろうとしたってできるものじゃありません。人から
聞いた話なら聞いたとおりにしか書けない、そうい
う女なんです」

ガルシアの言葉の端々から、働きの者の、純朴だが
想像力には乏しい、かたくなな農婦の姿が見える。

「すると、残る問題は、この行商人の話がどこまで
本当だったか、だ……」

噂うわさ話は人から人へと語り継がれる間に、どんど
んふくらんでいくものだ。

この手紙はほとんど伝聞の形式を取っている。ど
こまでが本当か、大いに疑わしいのである。

だが、もしこれがすべて事実だとしたら——。

それこそとんでもないことになる。

手紙の日付は七月四日となっている。鳩は一日に
数百カーティヴを飛ぶという。だからこうして、二
日後の今日、手紙を読むことができる。

同じ情報をパラストが入手するには、まだ何日も
かかるはずだ。

この手紙を受け取ったガルシアの母親や家族は、
事件そのものはそれほど重大とは思わなかった。

何と言っても一度も訪ねたことがない国であり、
見たこともない王様である。えらいことが起きたと
思いはしても、実感はない。

むしろ、心配なのは手紙の差出人のことだった。

王様が死んで、タンガがデルフィニアに負けたら、

嫁いだ娘の暮らしはどうなるのだろうと、何か悪いことにならないかと、興味はそこに集中していた。

ガルシアだけがいやな予感に駆られ、これはハイオン公爵の耳に入れておいたほうがいいと判断して、駆けつけてきたのである。

ガルシアは、今までも妹から手紙をもらう度に、その内容をハイオン公爵に告げていた。もつとも、妹はただの農婦である。手紙の内容も生活に関したことがほとんどだ。

それでも、その手紙からタンガの様子を垣間見ることができた。小麦の挽き料がいくらになったとか、今年は林檎が豊作だとか、その程度のことでも、実際に現地に住む人間の言葉である。ハイオン公爵はいつも熱心に耳を傾けていた。

今日のガルシアの訪問も、その類のことだろうと思つて迎えたのだが、この手紙には仰天した。

危うく腰を抜かすところだった。

次に、背骨も凍るほどの寒気と身震いするような

興奮が襲つてきた。

よくぞ、その妹は鳩を持って帰つてくれたものだ。また、よくぞ、鳩がいるときに、この事件が妹の耳に入ってくれたものだ。

「これは一刻も早く陛下にお知らせせねばと思い、お目通りを願ひ出た次第です」

「お手柄だ、舅どの」

言つて、オルテスはガルシアに目線を移した。

「お前もだ。よくぞ知らせてくれた。このオルテス、心から感謝する」

「へ、へい。もつたいないことで……」

「この手紙、しばらく預からせてもらう。よいか」

「へい、それはもう……」

「当分の間、この手紙の内容は決して人に話してはならんぞ。迂闊に外に洩れたら、お前たちの身も危うくなる。そのことを家族にもよくよく言い含めておけ」

厳しく命じた上で、オルテスはガルシアに褒美を

与えて下がらせたのである。

二人になると、オルテスは義理の父に問いかけた。
「舅どのの意見は？」

「正直なところ、あの王妃に関したことでなければ一笑に付しています」

きっぱり言って、公爵は首を振った。

「これがすべて事実であるならば、グリнда王妃はご自分の身柄をタンガから取り戻し、ボナリスを破壊し、ゾラタス王を討ち取り、ウォル王と二人轡くつわを並べてケイファードを攻撃しようとしていることになりました。歴代の英雄十人分の働きをお一人ですのけているようなものです。しかし……」

「あの王妃ならやりかねない」

「仰せの通りです」

グリнда王妃が現在どんな状況に置かれているか、王妃に関するタンガの言い分がどのようなものか、公爵も知っている。

ブルクスはそうしたことを包み隠さず話していた。

黙っていても、いずれタンガがパラストに話し、パラストはサンセベリアに話すことだ。隠しても仕方がない。国王が単独で出奔したことも洗いざらいうち明けていた。

「宰相がこれを知ったら大喜びなさるでしょうが」

「馬鹿な。言えるものか。ここぞとばかりに協力を求められるぞ」

「では、陛下はデルフィニアへの協力はできないとお考えですか？」

逆に問い返されて、オルテスは難しい顔で沈黙してしまつた。

そう一概いちがいに決めつけることはできない。

何しろあの手紙だけでは、ゾラタスが本当に討ち取られたかどうかわからない。

また、そうした例が実によくあることなのだ。

合戦という極限状態では、誰もが命の奪い合いに眼を血走らせている。接戦では特にそうだ。どんな弛たるみも許されない。

自分が生き残るか敵に殺されるか、兵士達の心を支配するのはそれだけだ。敵を斬り伏せた次の瞬間、自分が斬られるかもしれない。隣にいた仲間が流れ矢に倒れた。次は自分かもしれない。

そんなぎりぎりの緊張状態を脱して、形だけでも勝つたとなれば、話は自然と大きくなる。

負けた側はさんざんに言われるものだし、主将が話の上で殺されてしまうことも珍しいことではない。武將の生死、特に総大將の生死は、その首級を檢分するまで決して信用してはならないという兵法の教えもあるくらいだ。

まして、峻烈しゅんれつ、獍猛どうもうで知られるタンガ国王である。

いくら相手が現世の戦女神といえど、そう簡単に倒されるとは思えないのだ。

「しかし、これが事実だったら……」

脳裏で何度繰り返し返したかわからない思いを、オルテスは言葉にしていた。

「デルフイニアと和睦するべきでしような」

サンセベリア国王の舅は即座に言った。

「ブルクスどこの話では延べ三万の軍勢がタンガへ向かったと言います。それだけの軍勢が——しかもウォル王とグリンダ王妃——この二人の英雄が指揮を取る軍勢がケイファードへ進んでいるとしたら、阻止できるのはゾラタス王だけです。そのゾラタス王が討ち取られたというのなら、これが真実なら、ナジェット王子もケイファードに残った武將達も、あのお二人の敵ではありません」

「いや、わからんぞ。前にも遠路はるばる、北から応援にやってきた軍勢があつた。タンガとの同盟がまだ続いているとしたら……」

「また、しゃしゃり出てくるかもしれないと？」

「可能性はある」

これほど事がせば詰まっていなければ、事実を確認してから動くのだが、今はその時間がない。

パラストからは一刻も早く増援をよこせと、矢の

催促が来ている。

一方で、デルフィニアの宰相も断じて引き下がる気配がない。

サンセベリアはいつでもどちらかを選ばなければならなかった。

オルテスは家臣達を召集し、手紙の内容を披露し、意見を求めたが、それどころではなかった。全員が全員、石のように硬直してしまった。

弱小国のサンセベリアは今までに何度も、他国の傘下に入っている。生き延びるためにどこかの庇護を受けるとか、敢えて従属するとしたら、どの国の王を選ぶかという問題に直面している。

寄らば大樹の陰という。サンセベリアの家臣団は、少しでも寄りがいのある大樹を見抜くことにかけて非常に優れた眼力を持っているのだが、その彼らにして頭を抱えてしまった。

かつて経験したことのない、難問中の難問である。老臣の一人が脂汗に濡れた顔で言う。

「問題はこの手紙が事実なのか、また、どこまでが事実であるか、です」

「いかさま」

「ゾラタス王の死が確かならば、もちろんデルフィニアと再度の友好を結ぶべきです。それに關しては皆様ご異存はございませんまい。怖いのはパラストを袖にした後、実はゾラタス王が生きていた、となることです」

「その逆も考えられます。この手紙を信用できないものと決めつけ、当初の予定通りパラストの軍門に下った後で、ゾラタス王を倒したデルフィニア軍がパラストを攻めたらどうなりますか？」

全員が再び沈黙する。

どちらも考えるだにぞっとする。

思案に行き詰まったのは家臣だけではなかった。

オルテスもまたためらっていた。決断を下すには材料が足らなさすぎる。

八方ふさがりの状況を打開したのは、下座からの

声だった。

「どっちにせよ、問題はデルフィニアの王妃さんだ。違いますか？」

注意深く言葉を選んではいらぬもの、やや皮肉な、きな臭さの漂ただよう口調だった。

ダルトンである。

サンセベリアの軍勢は規律と訓練の行き届いた行儀のいい正規軍の他に、遊牧民や傭兵出身の男達を集めた部隊を持っている。

ダルトンはそうした男達のまとめ役だった。

「あのお人が無事ならデルフィニアにつく。そうでないならパラストにつく、そういうことでしょう」

乱暴な意見だが、オルテスも同意を示した。

「もっとも露骨に言ってしまうば、その通りだ」

パラストよりはデルフィニアのほうが信用できる、この感触に今も変わりはない。

ただ、王妃のことだけが問題だったのだ。

デルフィニアの妃將軍。彼の国を何度も勝利に導

いてきた英雄にして王妃である。その人がタンガに捕らえられているのでは、デルフィニアは勝てない。共倒れになるわけにはいかないと思ったからこそ見限ることにしたのである。

すると、ダルトンは苦笑に似た表情を浮かべつつ、しれつと言つてのけた。

「それなら、話は簡単だ。我々は味方のふりをしてパラストに合流する。そして、あの手紙に間違いがないと確認できた時点で、デルフィニアに寝返りを打つてのはどうです？」

重臣達は眼を剥むいた。

オルテスもさすがに声を失った。

何とも言いがたい表情で、疑わしげに念を入れた。「すると？ 手紙の内容が間違いだとかわかったら、我々はそのままだらパラストに味方をするのか？」

「そうするしかないでしょう。王妃が捕まったら、デルフィニアはタンガに勝てません」

「勝てないか？」

「少なくとも、ひどく難しいと思います。あそのこの王様は何のかんの言っても、王妃さまを大事にしていますからねえ。見殺しにはできないでしょう」

「王座を投げ捨てて救いに行くほど、愛してもいるようだしな」

「逆に、その手紙の内容が事実だったら、タンガに勝ち目はありません。あたしはナジェック王子ってお人を実際には知りませんが、タンガの次期国王が父親ほど切れるって話は一度も聞いたことがない。鼻^{ひいきめ}眞目に見ても、あのお二人に立ち向かえるようなご器量^{ようさ}ではないと思いますよ」

「要塞都市ケイファードと、ゾラタスの片腕だった重臣達がそっくり残っていても、か？」

ダルトンは首を傾げ、曖昧^{あいまい}な微笑を浮かべている。何と言いたかったのかはわからない。明瞭な言葉にしない彼の代わりに、居並ぶ重臣達がいつせいに難色を示した。

「しかし、それはあまりに卑劣な……」

「我が国の外聞がひどく悪くなるのでは？」

「さよう。いくら弱国の宿命といっても、ものには限度がある。諸外国から卑怯^{せうけつ}の誹^そりを受けることはまぬがれないぞ」

だが、ダルトンは平然としたものだった。

「卑怯と戦略は紙一重です。それに、そんなことを言うなら、よその国の王妃を寝取ろうってほうが遙かに問題だと思えますがね」

至極もつともな意見である。

重臣達にも返す言葉がない。

ブルクスからこれを聞かされたとき、オルテスも開いた口がふさがらなかつたものだ。

ダルトンはさらに言う。

「状況が変われば、今までの味方が敵になることはいくらでもあります。堂々と理由を説明した上で離反なら、それほど汚くはないでしょう」

「ダルトンはつまり、手紙の内容は真実だと思ってるのだな。ボナリスの敗戦も、ゾラタスの死も」

「まあ、田舎の、ただの噂話にしては度が過ぎるんじゃないかとは思いますが。それに、その村はボナリスから二十カーティヴしか離れてないわけでしょう。確かに近くはないが、三日も四日もかかるわけじゃない。馬ならほんの一走りだ。まるつきりのでたらめが伝わると思えないんですよ」

「あくまで推測で、確信はないわけだな？」

オルテスが訊ねると、ダルトンはまた真意を隠すように、曖昧に笑った。

「そりゃあそうですね。あたしは千里眼じゃない。鳩のような翼もない。ただ、あの王妃さんが捕虜になつたって聞いたときから、ずっと思っていました。このままですむわけではないってね」

それは、オルテスも同感だった。

およそ若い女とは思えないあの気性、あの技倆。

射抜くような光で人を見るかと思うと、茶目っ気たっぷりに笑う緑の瞳。

不思議なものだと、オルテスは思った。

どうやら自分はその人を懐かしんでいるらしい。もう一度、あのふてぶてしいくらいに強く美しい姿を眼にしたいと願っているらしい。

こうと決めれば、オルテスも兄を追放して王冠を手にした男だ。微笑して言った。

「では、その手で行くか」

「パラスト軍に合流なさいますか？」

「これ以上待たせるとオーロン王はこちらに軍勢を向けかねないからな。せいぜいご機嫌を取ることしよう」

生き残るために強い相手を選び、精一杯利用してきた国の人々である。国王の判断に異を唱える者は誰もいなかった。揃って頷いた。

「後はデルフィニアの宰相の扱いが問題になるが、どうしたものかな？ 王妃の無事とゾラタスの死がはっきりするまで、王宮の客人でいてもらうか」

これは家臣団への問いかけだった。

ハイオン公爵が首を振る。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。